

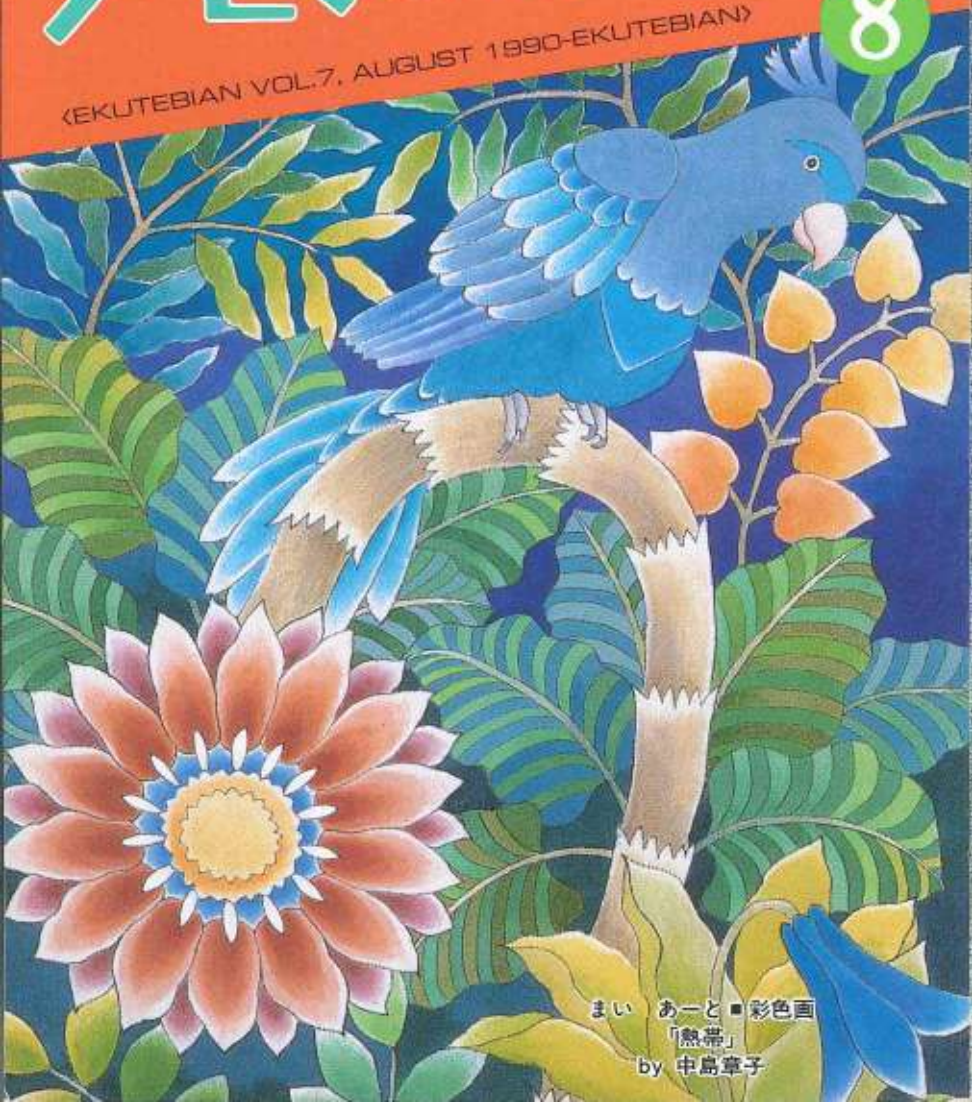
月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

8

〈EKUTEBIAN VOL.7, AUGUST 1990-EKUTEBIAN〉



まい あーと ■ 彩色画
「熱帯」
by 中島章子



蕎麦「信更」(栄町)では四季に応じて暖簾を替えている。染色家・千秋洋子さんの作品群。



「角商店」(栄町)は中の三巾が好まれるのにも関わらず、あり、店の「たぬき屋」(錦町)は暖簾の中心に「たぬき」のイラストが描かれている。



さすがに蕎麦店の暖簾は神経がゆき回っている。夏冬に分けて掛けられ「吾平」(栄町)の老舗に対して「無慮」(錦町)の新店は暖簾のうえでも好対照をみせている。



当世暖簾考

とうせいのれんこう

「暖簾の古さ」「暖簾分け」などと幅を広げてきた。まさに「暖簾の重さ」は計り知れないものがある。その色合い、生地、文字などに思い入れが深く、新旧とりまぜて今日も街を彩ってくれている。

暖簾はキレの帳をつるして陽の光を防ぎ、また目隠し用に発達してきたと云われている。しかし、段々に「店」そのものの顔となり抽象化されて「暖簾に腕押し」



和菓子の「紀の園屋」(錦町)は店構えにマッチした三巾の長暖簾。日本の伝統にささえられる和菓子に相応しく映っている。



「武堂薬局」(錦町)はご主人自らの筆で店名を。



どんかつ、寿司、てんぷら、それぞれの特色をだして



日除けが暖簾の一つの機能だとすれば「やまと」茶月」の場合は暖簾の図柄が「葉太郎」は中国の意匠が巧みに採入りの水引暖簾を飾る。ラーメン店、中華料理には赤が圧倒的に多い

ことわざ問答

漢字一字挿入せよ

5 実の生る木は 棒ほど願って 棒ほど願って 棒ほど願って

「ウアウアアバ」。母親に抱かれ たその子は、言葉にならない言葉 を叫ぶ。私にはそれが「お母さん 大好き」と言っているように見え る。

8月2日木

「日本フィル 親と子夏休み コンサート」

会場：立川市市民会館
時間：PM11:30
※JCT(3329) 1311へ

立川駅ビル「ウイル」には、西と東にエレベーターがある。素通しなのでガラス越しに北口の高島屋、三井信託銀行、パスターミナル、信号待ちの人の列・・・。上下する何秒かの間にこれらの景色が大きく変わったり、遠い世界の世界のようになり、遠く世界の色が透り透りになり、その頃まじりまじりとした自動エレベーター

(案内嬢のいない) に乗るのが好きで、各階のボタンを押したり、二階で降りて三階で乗ったりなど一人で遊んでいた。そのせいでろっか、いまだにエレベーターの縦揺れと停止階に着いたときの軽いパウンドが心地よい。まして、外の景色が眺められるとあっては、と思う一方で、高所恐怖症でもあるのだから矛盾している気もする。小さな箱の中で押しこめられた人は、ひたすら前方をみつめる。今、何階なのか、ランプの位置が変わること確認しようとする。赤ん坊が母親の腕の中で、手をばたつかせる。白い夏服を着て、

と全身で言っているようにみえる狭い箱の中で、この母子だけが停止階も外の景色も見ようとせず、二人だけの世界にひたっている。(東島弘子)

真如苑だより

■日時 8月18日(出) 午後2時半～4時半

■御本尊、真如堂
宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございませう。

■立川市民(成人)に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡ししてください)へ。

えくてびあん 第73号

平成二年八月一日発行

発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パルクビューハイム501-1100
電話 0425-200082
FAX 0425-201297

編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 南大橋社

思いを淹れて ホットなふれあい

火曜・木曜・土曜。毎週この日、緑深い中央公民館にコーヒーの香りが満ちるのをご存知だろうか。障害のある人も、そうでない人も、共に学んで働いてふれあえる場を、と始められた喫茶コーナー。このコーナーはどことよりもホットで味は、どことよりもやさしい。

中央公民館の談話室で週3回、喫茶コーナーが開かれる。運営しているのは「障害者」の自立を目指す会のメンバー、それぞれにハンディをもった人たちが力を合わせ、すでに三年半になる。現在は喫茶コーナー実習としての活動だが、この程その実績が市に認められて談話室が常設の喫茶コーナーに改装されることとなった。実習ではなく営業としての活動が始まるわけである。

「喫茶コーナー」は11時に動き始める。会員の石井順子さん(栄崎町)が11時ちょうどにやってくる。代表の箱石強さん(曙町)が「いつも時間ピッタリだね」と声をかけると、石井さんはニコニコと「この仕事、面白いもの。そこへ他のメンバーも車いすで到着した。三人で手分けしてテーブルセット、カップの用意、とテキパキ準備をすすめる。30分程で談話室はすっかり喫茶コーナーに変身した。辺りにコーヒーの香りが漂い始める。12時。講座の受講を終えて帰る始めた人たちが、香りにひかれて次々に来店。一杯100円のコーヒーに三々五々、くつろいでいる。「慣れないうちはオーダー書きに行くのもお互い譲りあったりして。今では顔なじみのお客さんという話が出来るようになってきました。お客との和やかなやりとりにも培った自信のようなものがうかがえる。ハンディをもった人たちと、そうでない人たちとの交流が、ごく自然に行われるうちに、午後の時間が静かに流れていった。

現在、会員は約50名、支援会員が約100名いる。「ここへ来て実際にやるのが好きな人、通信のイラストだけ描いてくれる人、文を書く人、いろいろです。それぞれが自分の都合にあわせて、出来ることを淡々と語る箱石さんだが、常設の喫茶コーナーが実現に向け動き出した今、思いは深いのではないかと。石井さんは「喫茶コーナー通信」より、イラストは大塚芳子さん(富士見町)。

「ようこそ、協和へ」街角から笑顔のごあいさつ

協和銀行

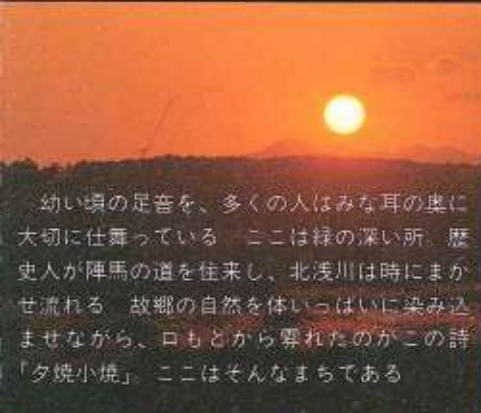
8月。涼しげな季節にはまだ遠いように思われるが、すでに。初秋。なのであ。空に朝雲、林のなかには鈴虫、そしてカリン等々。それぞれに秋への準備が進められている。

「表紙は語る」
まい あーと 染彩画「熱帯」 by 中島肇子

今月の表紙は、夏まつりだ。女子美術短大の絵画を出、勤めながら手描きサラサの工房にて染めの基礎をマスターしたという中島さん。もうすでにこの世界に入っている。今までは趣味の延長上にあっただけですが、昨年からはこれかなにかと思いつき、染色を私の生活にしました。布はあつたかくていいです。とくに布の中に色がニジム時のふうあいは、なんともいえません。描きながら新しい自分を発見したいと思えます。もしその中から、見てくれた方に夢が与えられたらとても嬉しいですね。立川・国立で開いた個展を土台に、来年2月には、若者のメッカ原宿・表参道にて個展開催が決定している。

東風

現代のような暖簾にまで洗練されたのは桃山時代ではないかという。初期の頃、これを「のうれん」と呼んだとモノの本に記されている。華やかなるキレから、こんなに殺然とした貌が生れるものであろうか。一般家庭で間仕切りに使われないこともないが、何と云っても日本の商家の美学であろう。そこから「暖簾を守る」とか「暖簾分け」「暖簾に腕押し」などというたかが布一枚とは云い切れない「重み」が生じてきたのであろう。★今月は立川狭しと、自転車飛び回り暖簾影に走った。たしかに商標や屋号が染め抜かれていて一見「看板」あるいは「広告布」のようではあるが、画然として違うのは「思い入れ」の強さとみだり店主みずから筆をとって、さらさらッとした屋号がそのまま暖簾に乗っている場合などは、もう「作品」と呼んでもよろしいのではないかと。藍染めあり浅藍色あり。生地もいろいろだが夏冬、衣がえをさせるあたり、さすがに日本の伝統とみだが、そばの「信更」では四季に応じて暖簾を掛け替えているというコリコリうだ★人間にも暖簾が掛かっている人、そうでない人がいるように思う。就寝まえに寝床のうえで正座をして、合掌してから休む友人がいる。彼に「今日は、今日一日に感謝して暖簾を降ろす。正にその一瞬なのであろう★水かえて 金魚めざむる えくてびあん。」



幼い頃の足音を、多くの人はみな耳の奥に大切に仕舞っている。ここは緑の深い所。歴史人が陣馬の道を往来し、北浅川は時にまかせ流れる。故郷の自然を体いっぱい染み込ませながら、口もとから零れたのがこの詩「夕焼小焼」。ここはそんなまちである。

陣馬の中村雨紅さん

立川 発

カルチャートレイン

半日ほどの「小さな旅」へ出てみませんか。そこには思いがけなく自然が息づいていたり、懐かしい「この人」に会えたり。



まじとまじと木々の隙の中を歩くとそこは江戸開きの地



原生の地
宮尾神社



観音寺の真鍮製の鐘に「夕焼の鐘」の詩を刻む



宝生寺の鐘



村花と「陣馬」について
たまたま「中村雨紅さん」
と名を「陣馬」に



観音寺の鐘



観音寺の鐘



信州に故郷をもつ草刈信先生
により曲が付けられた



観音寺の鐘